実践団体・プラン基本情報

実践団体の基本情報

記入日	西暦 2025 年 1 月 7 日（2024 年度のチャレンジプラン）
プラン名	未来へ向けて　KAIHOKU つなぐ・つながるプロジェクト
実践団体名	宮城県石巻市立開北小学校
代表者名	鹿野　宏美
電話番号	0225-96-5401
メールアドレス	0212_elskaihcl-e@gs.myswan.ed.jp
実践団体の説明	平成 23 年の東日本大震災で地震・津波被害を受け体育館が避難所となり 700 名以上が避難した。東日本大震災を体験していない児童が、災害を自分事として捉え、未来の町づくりに貢献できる力を付けることを目的として活動している。
所属メンバー	宮城県石巻市立開北小学校 （代表）校長　鹿野　宏美 （担当）防災主任　教諭　鈴木　裕司
活動の本拠地	宮城県石巻市大橋 1 丁目 2 番地 1
活動開始時期・結成時期	2023 年 4 月 8 日
過去の活動履歴・受賞歴	2023 年度石巻市復興・防災マップコンクール奨励賞受賞

プランの基本情報

プランでの実践主体	1. 学校・教育関係
プランの運営側の人数（実数）	教職員 20 名
プランの活動地域	宮城県石巻市
プランの防災教育の対象者	3. 小学生（低学年）　4. 小学生（中学年） 5. 小学生（高学年） 10. 教職員・保育士等

	11. 保護者・PTA　12. 地域住民
防災教育の対象者の人数（実数）	約　760　人
プランが対象とする災害	1. 地震　2. 津波　3. 風水害
プランの活動目的	1. 防災意識を高める　2. 災害を想定した訓練 3. 防災に関する知識を深める 4. 遊び・楽しみの要素を入れた防災　5. 災害を疑似体験 6. 災害に強い地域をつくる　7. 災害対応能力の育成 8. 防災に役立つ資料・材料づくり 9. 防災に関する技術の習得
対象者が身につく知識・技能等	1. 地震・津波・火山災害 2. 気象災害 3. 災害時に発生する課題・影響 4. 過去の教訓が教える対応策 5. 起こりうる災害の地図等による可視化 6. 平時に行う被害を出さないための備え 7. 災害発生時に身の安全を確保するための行動 8. 災害対応・復旧・復興時の立ち直りに向けた助け合い
プランの活動形態	1. イベント・行事　2. 講習会・学習会・ワークショップ 3. 講演会・シンポジウム 4. 総合的な学習（探求）の時間 5. 教科　6. 特別活動　7. 道徳　8. 学校内の諸活動 10. 校外学習・移動教室　11. 家庭や地域で行う個別学習 12. 体験学習　13. 避難・防災訓練 14. 研究　15. 読書・絵本・読み聞かせ
プランでの連携先	1. 学校・教育関係 3. 保護者・ＰＴＡ　4. 町会・自治会　5. 自主防災組織 8. 国・地方公共団体 9. 公共施設　10. 企業・産業関係　11. ボランティア 12. ＮＰＯ　14. 職業・職能団体

	15. 学術組織
実践にかかった金額	30 万円未満

プランの年間活動記録

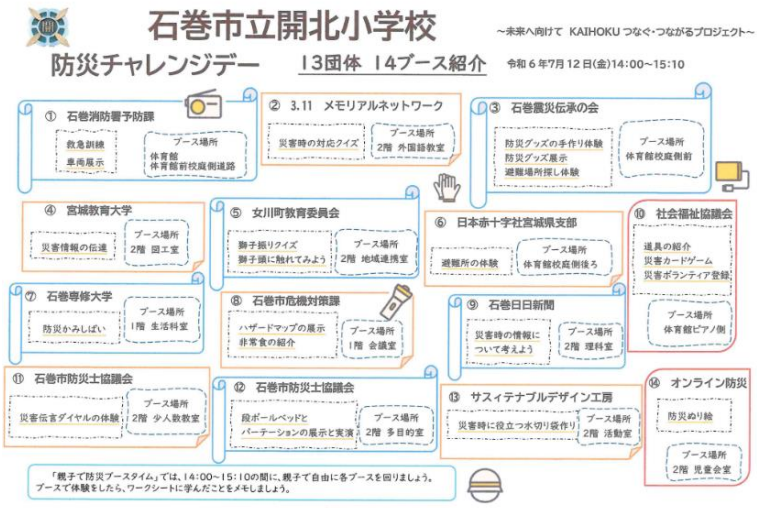
	プランの立案と調整	活動準備	実践活動
４月	５年生防災学習計画を児童へ伝える。		
５月	防災チャレンジデーに参加する１３団体との渉外	５年生震災遺構見学先への渉外と事前準備	５年生震災遺構見学（門脇小）
６月	防災チャレンジデーに参加する１３団体との渉外		
７月	防災チャレンジデーに参加する１３団体との渉外	防災チャレンジデーの会場準備、資料準備	防災チャレンジデーの実施
８月	防災チャレンジデーの振り返り	５年生震災遺構見学先への渉外と事前準備	夏休みの課題として「防災リーフレット」を一人一枚ずつ作成（３年生４年生６年生） ５年生はグループで防災リーフレットを作成
９月		５年生震災遺構見学先への渉外と事前準備	５年生震災遺構見学（大川小） 石巻市主催の SDGｓフェスに活動の成果を展示
10 月	震災伝承団体、石巻専修大学との調整	５年生の防災学習に、震災伝承団体や石巻専修大学の学生が協力	
11 月	震災伝承団体、石巻専修大学との調整	５年生の防災学習に、震災伝承団体や石巻専修大学の学生が協力	石巻市総合防災訓練で令和５年度の防災マップのプレゼンテーションと令和６年度の防災リーフレットの紹介
12 月		５年生防災マップの作成	石巻市復興防災マップコンク

			ールに出品し、第３位を受賞
１月			「石巻防災震災伝承のつどい」リレーセッションにて、これまでの防災学習の取組を校長がプレゼンテーション
２月		授業参観で行う保護者や４年生を対象にしたプレゼンテーションの練習	５年生は、授業参観で、保護者へ防災学習の成果をプレゼンテーション ５年生は、４年生を対象に作成した防災マップのプレゼンテーション
３月	次年度計画に防災チャレンジデーを設定する		

実践したプランの内容

プラン全体の概要	① 震災遺構を見学する（５年生）ことで、災害を自分事と捉え、未来の町づくりを考える。 ② 親子で学ぶ「防災チャレンジデー」を設定（全校）する。 ③ 防災プレゼンテーション（５年生）を実施し、児童から保護者や地域に防災について発信する。 ④ コミュニティ・スクールを活用し、地域との連携を深め、地域防災の充実を図る。 ⑤ 学びを生かした防災マップを制作（５年生）し、地域の施設へ掲示することで、地域住民にも防災について知ってもらう。 総合的な学習の時間の中で、５年生が防災学習として扱うとともに、全学年の児童約 300 人と保護者約 200 人が共に防災について学ぶ「防災チャレンジデー」を実施した。 ５年生の子供たちは、震災遺構を見学し専門家からの説明を聞き、自分の町の災害の歴史を知り、自分たちでできることを考えた。学校周辺を大学生と共に歩いた後に、防災・減災の視点で防災マップや防災リーフレットを作成し、地域や保護者へ発信し、災害を自分事として捉えることができた。

	「防災チャレンジデー」では、親子で共に防災について学び、保護者は子供と一緒に有事に役立つ知識を学ぶことができた。

プランの「チャレンジ」の結果	チャレンジすること ① 東日本大震災の疑似体験を通し災害を自分事として捉える（門脇小、大川小遺構の見学）。 ② 親子で防災を学ぶ「防災チャレンジデー」を設ける。行政や消防、大学、震災伝承団体、新聞社など 13 団体が協力し、展示やクイズ、体験型のブースを展開する。  ③ 防災プレゼンテーションを実施する。 ④ コミュニティ・スクールを生かし、地域との連携を図る。 ⑤ 石巻市総合防災訓練時の地域の避難訓練に、児童

	の意見を入れてもらう ⑥ 防災マップ・防災リーフレットを通して地域への発信を行う。 コミュニティ・スクール委員を通して、防災チャレンジデーの協力団体に参加依頼した。また、石巻市総合防災訓練では町内会と連携したり、中学生と共に段ボールベッドを作成したりした。 ５年生は防災チャレンジデーの体験や、震災遺構を見学した体験を基にして、自分の探究したいテーマを決め、探究活動へつなげた。グループごとに防災リーフレットにまとめたり、学年で２枚の防災マップ（縦 160 ㎝×横 220 ㎝）作成したりした。
実践内容・方法・成果	「防災チャレンジデー」では、13 団体が提供した体験型のブースを親子で巡って学び、明暗を分ける災

害時の情報の在り方などを学んだ。

宮城教育大学の学生有志によるブースでは、制限時間内の中で災害情報を正しく伝言するゲームを行った。情報収集について大学生は「いつ誰が言ったのか、複数の情報を確かめたかを判断し、安全に避難できるようにしてほしい」と助言した。

伝言ゲームに参加した６年生児童は「前の人から来た情報がすでに間違いだった。ゲームは楽しかったが、正しいことを伝える難しさを知った」と話した。保護者の一人は「ゲームのほかには避難所の備品作りなどを体験した。子供と一緒に回ることで、私自身も有事に役立つ知識を学べた」と語った。

「災害伝言ダイヤルの掛け方」を実施した防災士協議会や災害ボランティアの道具を紹介した石巻市社会福祉協議会等、多くの団体から「このように実践できる機会を与えてもらい良かった。また来年度以降もぜひ実施させてほしい」という回答があった。災害防災に関わる行政や諸団体は防災意識を地

域に広めていく機会を求めていることが分かった。一過性のイベント的な活動に留まることなく、継続的に実施していく必要性を感じた。

防災学習に取り組んだ５年生は、校外学習や探究活動のときに大学生から助言を直接もらうことで、地域や保護者へ発信するまとめ活動の参考になった。

石巻市総合防災訓練では、児童は自分の住む町内会の総合防災訓練に参加し、地域住民と共に活動をした。防災講話を聞いたり段ボールベッドやパーテーションを中学生と組み立てたりし、顔が見える関係になった。また、自分たちが作成した防災マップのプレゼンテーションを地域住民に対して行ったり、中学生と共に防災リーフレットを展示し紹介したりした。

東日本大震災を経験していない児童が身近に起きる災害を自分事として捉えるために、地域で活動する人材の力を活用してきた。防災関連について様々な分野で活躍する団体と交流することで、児童には新たな気付きが生まれ、その後の探究活動につながっていった。伝える相手を明確にした成果物を作成するように指導者は声掛けを行い、発信させた。

	今年度の本校の取組が石巻市から評価され、１月２６日の「石巻防災震災伝承のつどい」で校長がプレゼンテーションを行う。これまでの取組で児童が学んだ「怖いのは知らないこと」を主な話題として、市民に向けて発信する。 令和７年度も、親子で防災について学ぶ「防災チャレンジデー」を実施する予定である。防災・減災の視点だけでなく、持続可能な地域・社会づくりにつながる更なる連携や発信方法を模索しながら教育活動を継続していきたい。

プランにおける工夫：プランを実践する上で、下記について具体的に工夫をしたことはありますか。

１．【準備段階】運営側の担当者を決める際の工夫	・防災主任を中心に、役割分担を明確にした。 ・本校では「まなび」「からだ」「こころ」の３つのプロジェクトに分かれ学校教育目標に迫っている。防災教育は「からだ」プロジェクトの一環として年間４回の話し合いを定期的にもち、進捗状況や取り組むことを確認して進めた。
２．【準備段階】地域のキーパーソンと連携する際の工夫	・学校運営協議会委員メンバーや町内会の会長と、地域防災連絡会で連携をした。
３．【準備段階】運営側を組織化する際の工夫	・教育計画に防災学習を位置付け、校務分掌を生かした。 ・学校運営協議会の防災教育部会を生かした。
４．【準備段階】対象者や対象地域の範囲を決める際の工夫	・児童だけではなく、保護者や地域住民と連携した。
５．【準備段階】準備時間を確保する際の工夫	
６．【準備段階】活動場所を確保	

する際の工夫	
7．【準備段階】活動資金を確保する際の工夫	・自治体の助成金に応募し、震災遺構見学の際のバス代とした
8．【準備段階】知識や情報を収集する際の工夫	・震災遺構を見学し、専門家による勉強会を行った。
9．【準備段階】教育・訓練プログラムや教材を作成する際の工夫	・専門家の協力を得た。（石巻市危機対策課、石巻市防災士協会、震災伝承の会）
10．【実行段階】経験豊富なアドバイザーを確保する際の工夫	・専門家（防災をテーマに研究している宮城教育大学の研究室の教授）とゼミの学生と連携した。
11．【実行段階】地域の理解を得て関係機関と連携する際の工夫	行政・消防・大学・震災伝承団体、新聞社等と連携した。 （連携団体） 石巻消防署、石巻市危機対策課、宮城教育大学、石巻専修大学、日本赤十字社、社会福祉協議会、石巻日日新聞、石巻市防災士協議会、石巻震災伝承の会、3.11 メモリアルネットワーク、サステナブルデザイン工房、オンライン防災、町内会
12．【実行段階】活動時間を確保する際の工夫	総合的な学習の時間に実施した。
13．【実行段階】活動経費をなるべく抑える際の工夫	・自治体の助成金に応募し、バス代とした。 ・防災チャレンジデーでは、消耗品以外の道具や物品は原則として団体の持ち込みとして、活動経費をなるべく抑えた。
14．【実行段階】他の実践団体と交流する際の工夫	・他の実践団体から中間報告会でプログラムを紹介してもらい共有した。
15．【継続段階】後任者を育成する際の工夫	・学校全体で共有し、教職員も自分事として考えるようにした。
16．【継続段階】活動で得られた知識・経験を、かたちにまとめる際の工夫	・防災リーフレット、防災マップにまとめた。 ・防災チャレンジデーで学んだ後に、親子で振り返りを行った。
17．【継続段階】活動の成果を外	・学校だよりで保護者・地域へ発信した。

部に発信する際の工夫	・石巻教育委員会学校安全推進課から防災チャレンジデーの取組を市内全小中学校へ配信した。 ・新聞社の記事として石巻市内に発信した。 ・学校ホームページで発信した。 ・石巻市主催の SDG s フェスに活動の成果を展示した。 ・石巻市復興防災マップコンクールに出品した。
18.【継続段階】活動内容を見直す際の工夫	・石巻市学校防災推進会議で今年度の取組を紹介した。 ・「石巻防災震災伝承のつどい」で校長がプレゼンテーションを行う。

今後の活動予定・今後の展開	今後も、小学５年生の総合的な学習の時間では、防災学習を位置付けていく。令和７年度も、親子で防災について学ぶ「防災チャレンジデー」を実施する予定である。防災・減災の視点だけでなく、持続可能な地域・社会づくりにつながる更なる連携や発信方法を模索しながら教育活動を継続していきたい。

その他（ＰＲポイントなど）	防災チャレンジプランを実践してみて、最大の成果は児童が災害に対して「怖いのは知らないこと」に気付いたことだと言える。これは災害を自分事として捉えて、探求心をもって活動してきたからこそ抱くことができた感想である。 プランタイトルに「つなぐ・つながる」とあるように、探究活動を通してインプットしたことを、地域住民や保護者に発信し「つながる」楽しさや必要性を児童が感じていた。

チャレンジプランを実践しての感想

チャレンジプランを実践しての感想・想い	ねらいとしていた児童が防災を自分事として捉えるということが達成されたと思う。このような機会を得たことで、児童の学ぶ姿勢が変わったということも大きな成果と感じる。